馬琴の読本における「候」と「侍り」の使い分け

――「俗」の表現として――

塚本泰造

馬琴の読本の文体が、雅俗折衷を志向するものであった事はよく知られている。その文体の試みは、俗語を導入し、文語めかしをすることだけであったろうか。本稿では、補助動詞「候」「侍り」に焦点を当てて、発話主体の性別による使い分けという原則を指摘するとともに、この二語の、雅語にない新用法のおおまかな位置づけをはかる。

はじめに

読本作者としての馬琴を代表する作品(1)においては、次に示すように、男の発話か女の発話かで「候」と「侍り」とが使い分けられている。発話者と被発話者を→で示す。

御身はこゝを落て…合戦の容をも物かたり候へ」と仰すれば、白縫涙さしくみて、「わらは女子の身にしあれど、父の子にして為朝の妻たり。今夫の生死をしらず、父又討死し給ふを外に見て、いかで落ゆき侍るべき。

父忠國→白縫　白縫→父忠國　弓張月　上154

かばかりの事に思ひまどひ給ふこそ、浅ましく候へ」とて、居丈高になつて諫れば、簓江は當然の理に、かさねて固辞んやうもなく、「げに思ひ悞侍り。

鬼夜叉→簓江　簓江→鬼夜叉　弓張月　上309

空しからざるに候はずや。」とおもたゞしく回答しかば、…中婦君は、このよしを聞て斜ならず欲び、「殿下などて狐疑し給ふ。かゝる祥瑞あるものを、誰かは否し侍るべき。

曚雲→尚寧王　中婦君→尚寧王　弓張月　下100

これのみならで、亡親の名を汚さじ、と思へばこそあれ惜からぬ、命を惜み侍るかし。」といひかけて目を押拭ふ、雄々しき少女の物がたりに、番作思はず小膝を拍、「…おん身が父とわが父と、共に後門を固めしかば、他事なく相譚候ひき。

手束→番作　番作→手束　八犬伝　一275

奥歯に物が夾りては、心かゝりに侍るかし。蟇六どのも腹

立て、額蔵をいといたう、叱懲らし玉ひしかば、…こゝへ出よ。」と見かへれば、額蔵愧たる面色して、頭を掻きつゝ小膝を勧め、「…頭顱病して候ひき。それも己が愚なる僻こゝろに候はん。許させ給へ。」と歓解にけり。…信乃は此彼問あへず、うち驚きたる面色して、「…疎意あるべくも候はず。」といふに亀篠うち笑て、「…願ふは五七の忌日限りに、おん身を母屋へ養ひとらば、後やすく侍りなん。

亀篠→信乃　額蔵→信乃　信乃→亀篠・額蔵　亀篠→信乃

八犬伝　二20

「音音は吾儕に侍るなる。何処より来ませしぞや。」と再問へば、欲しげに、「原来そなたで候か。

音音→荘助　荘助→音音　八犬伝　三124

あの鬼々しき継母が、不忍出せしなンどといはる、憎れ役は吾儕（わなみ）に侍り」といふに角太郎嗟嘆して、「…垂籠てのみ候へども、然りとて親のうへはしも、一ヂ日隻時も忘るゝ間なく、うち歎きて候ひしに

船虫→角太郎　角太郎→船虫　八犬伝　四14

「目今聞れ侍るがごとく、斧柄も母と願ひは斉一。この議を承引給ふや」と当面に問ふ妹伏の縁譚。朱之介は含笑ながら、思はずも膝を找めて、「そは有がたきまで辱き、御商量には候へども、

落葉→朱之介　朱之介→落葉　近世説2・65

いかで訪給ひねかし。然らば這地の無異も聞えて、（息子は）さぞな歓び侍るべし」といふを九四郎うち聞て、「月はこゝろ得候へども

長江→九四郎　九四郎→長江　新局3・143

これは間接話法においても、発話の主体の性別を基準として一貫している。

（侯鯖楼の主人→客の武士への発話で）綷の趣を遺もなく、阿夏に伝へ候ひしに、（阿夏→侯鯖楼の主人）『身ひとつならで子を携て、他郷に流浪へ侍れるを、…定かに知せ給ひなば、いかでか推辞侍らんや』と如此まうしてこそ候なれ。

近世説1・356

さらに承接する動詞の主語の性別にも影響されず、また、人間以外のものが主語であっても、発話の主体の性別によって二語は使い分けられている。

全廣といふ猛者が、夥の軍兵を領て、わが村に乱れ入り、老たる弱き差別なく、鏖にし侍る程に、

村長の娘海棠→為朝　弓張月　下193

八房もわが夫に侍らず、大輔も亦わが良人ならず。

（主語は忠犬八房）

伏姫→父義実　八犬伝　一238

父直秀も撃れ侍り。…母は本月十一日に、卒に綷絶侍りにき。

手束→番作　八犬伝　一274

いまだ披露に及ねども、主ある女子に候へば

（主語は浜路）

木工作→奈四郎　八犬伝　四146

木偶介は、良人にして良人に侍らず。実をあかせば小夏といふ、女児とゝもにわが宿の、寓居人で侍るかし。

阿夏→瀬十郎　近世説1・137

阿夏をこゝへまゐらせん。…薄命人で候へば、おん愛顧を願ふのみ」といひつゝ

（主語は阿夏）

侯鯖楼の主人→客の武士　近世説1・357

那苞は籾にて侍り。　少女→通能　新局3・318

これらの作品世界では、発話の主体が武士・貴族・姫君・道人・村長・商人・侠客・猟師・漁師・船頭・芸人・乞食の会話でも、「候」「侍り」の使用はほぼ同じ状況である。

一見例外に見える、男の発話に使われた「侍り」もある。これについては、次の例が端的に示すように、ほとんど男子の子どもの発話であって、いわゆる「おんなこども」（馬琴のことばで言えば「婦幼」）として女の発話と同範疇に属するものとすることができるのである。

あなわが父にておはしけり。さては恙なくて坐す歟。鶴にて侍り、亀にて侍り。

鶴・亀→父の毛國鼎　弓張月　下96

管見では、鈴木丹士郎（1973）が、馬琴の文語における敬語全般について考察した唯一のものであるけれども、「侍り」「候」の使い分けの実態については指摘がない。いったん口頭語の舞台から退場し、文語上に生き続けていた「侍り」「候」について、近世の文献については、俳文の「侍り」については森修（1959）野村雅昭（1973）の分析があり、井上豊（1973）に、本居宣長の『万葉集問目』の問答体における「侍る」「候ふ」の併用が指摘されているぐらいで、使い分けについては言及が無いようである。

また馬琴自身、待遇表現に関わることばに見識を持っていたことが、石坂正蔵（1944）に指摘されており(2)、事実『南総里見八犬伝』第二十三回に、

盃を勧るに趣あり。又をりをり、秀句を吐きて笑ひを催し、宮六等を称して殿といひ、檀那と唱へ、蟇六を大人と称し、亀篠を奥方とし、給事の奴婢を姉様と喚び、下男をすべて先生といふ。称呼縝紜徳操なき、是軽薄児の習俗なり。

八犬伝　二53

とある。馬琴が待遇表現に関わる言葉を使い分ける動機があったとしても不自然ではない。

本稿では、馬琴の読本における補助動詞「候」と「侍り」の使い分けの具体相を記述し、「侍り」と「候」に口語の性差を付与した、この新用法の位置づけを考察する。

一　「読本」というジャンルの文体が要請するものだったか

野口武彦（1977）では、「特定の小説ジャンルがつねに

表1

作者	作品名	成立・刊	地の文		会話文				その他・備考
					侍		候		
			侍	候	男	女	男	女	
都賀庭鐘	英草紙	1749	0	0	7	2	4	0	
	繁夜話	1766	0(1)	0	3(1)	0(1)	1(3)	1(1)	
建部綾足	西山物語	1768	1(3)	0	9(9)	5(7)	11(1)	2(4)	
	本朝水滸伝　前編	1773	25(21)	0(6)	138(31)	21(14)	140(11)	17(2)	
	本朝水滸伝　後編	～1774	18(21)	4(22)	111(52)	17(6)	223(29)	14(4)	夫婦(侍1)
上田秋成	雨月物語	1776	0	0	42(7)	15	0	0	
	春雨物語	1808	0	0	2(2)	1	1	1	
振鷺亭主人	風俗本朝別女伝	1798	1*	0	0	0	2	0	*小引
山東京伝	昔話稲妻表紙	1806	0	0	14	19	93(1)	27(1)	
感和亭鬼武	復讐鳴立沢	1806	15	1	4	3	9(2)	2	狐(侍1　候3)
一渓庵市井	復讐奇談七里浜	1808	0	0	3	8	0	1(1)	夫婦(候1)
小枝　繁	高野雍髪刀	1808	2	0	2	1	19(2)	4	序文含む／夫婦(候2)／心内語1
	儘馬楽奇談	1811	1(1)	0	61(4)	21 (2)	93(7)	13	
石川雅望	近江県物語	1808	0	0	5(2)*	0	273(30)	54(11)	*全て序文の会話
	天羽衣	1808	0	0	0	0	17(2)	19(3)	
十返舎一九	復仇女実語教	1809	0	0	1	2	1	1	
一柳嘉晋	鳥辺山鵲綾	1825	0	0	58(21)	53 (10)	10	8	
曲亭馬琴	小説比翼文	1804	0	0	3(2)	1 (2)	0	0	自叙の用例含む
	椿説弓張月	1807-1811	0(7)	0	21(2)	140(17)	265(20)	5	男の「侍」21例のうち子20
	南総里見八犬伝	1814-1835*	0(9)	0	22(4)	305 (28)	655(80)	0	*第九輯巻之六(岩波文庫(五))まで調査終了／夫婦(侍1　候3)／唄　候2／男の「侍」22例のうち子19例
	近世説美少年録	1829-1832	0(7)	0	12(4)	199(39)	183(35)	0(1)	男の「侍」12例全て年少・子12例
	開巻驚奇侠客伝　一～四集	1832-1835	0(29)	0	11(9)	199(23)	323(54)	0	男の「侍」11例のうち年少・子8例
	新局玉石童子訓	1845-1848	0(2)	0	19(1)	100(9)	254(25)	0(2)	男の「侍」19例のうち年少1例
萩原弘道	開巻驚奇侠客伝　五集	1849	0(2)	0	1(1)	64(7)	138(13)	25(1)	

注1　( )内は本勁嗣の数
注2　会話文には書状における「侍り」「候」含む

それに固定した文体をもって制作されるということは、おそらく日本の江戸時代特有の孤立した現象」であると指摘している。この馬琴の「候」「侍り」の使用はジャンルが強制するものだったのだろうか。

そこで発生期読本も含め、他の読本[3]に見られる「候」「侍り」（「さむらふ」や「はんべり」などの異形態も機能差が見られないのでこの二語で代表させる）の使用状況と比べた結果が表1である。絵本物・図会物などを含めた多種多様な読本を網羅するものではなく、代表的な作品群と比べてみたというに過ぎないが、それでもある程度の特異性がうかがえるのではないだろうか。

第一に、「候」「侍り」は作品の世界での口頭語を担うことばとして意識されていることである。その点、馬琴が「今のよみ本の嚆矢也」と評する『本朝水滸伝』の文体は、「候」「侍り」の使用という観点から見れば、地と会話の区別のない、

燃のこりてはべる柱どもをあつめて　32頁
官軍いたく責て、中の重の忌門に火つきてはべるとき、
33頁

したがって男であれ女であれ、その発話、さらには一文中にすら「候」「侍り」が同居する雑然としたものといえる。例を示す。

翁聞て、「さるにても我〃が子にてさむらふといふしるしや侍りなん」と申せば　翁→少女　11頁
塩焼王は不破内親王をかねて御気色はべりしが、是はさる

御罪のよしを書残し給ひて、ともに率ておはしてさむらふ」と奏す。　刀自の同輩たち→天皇　22頁

第二に、話しことばらしさを担う「候」「侍り」があったとして、馬琴は他の作者よりもその使い分けが徹底していたといえる。女の発話に補助動詞「候」がほとんど現れず、「侍り」がそれに代わる振る舞いを見せている。男の発話ではその逆の様相を見せている。『雨月物語』では性別に関係なく、対話は「侍る」一辺倒であり、

女かへり見て、「我が身夕々ごとに詣で侍るには、殿はかならず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。御心のうちはかりまゐらせて悲し」と潸然となく。正太郎いふ。「さる事に侍り。十日ばかりさきにかなしき婦を亡なひたるが、世に残りて憑みなく侍れば、ここに詣づることをこそ心放にものし侍るなれ。

女→正太郎　正太郎→女　349頁

（豊雄→父）人伝に申し出で侍らん」といへば、（父→豊雄）「親兄にいはぬ事を誰にかいふぞ」と声あららかなるを、太郎の嫁の刀自傍にありて、（長男の嫁→豊雄）「此の事愚なりとも聞き侍らん。　366頁

石川雅望の作品では逆に、男も女も「候」体で会話している。

山東京伝の『昔話稲妻表紙』では、性差に対する配慮が馬琴より不徹底である。

磯菜夫にむかひ、「いふこと聞ことあまたにて、何から語りはべらんや。…文弥もまたおん身や姉を恋しがり候ゆゑ、俄に思ひ立、師匠にしばしのいとまを乞、まかり下り候ひぬ」　磯菜→夫　237頁

烏帽子宝を産はべりて、唐の鏡とかしづかれ、…はれぬ思ひの冥道に、今に迷ふて居候　白拍子藤波の亡魂→兄の又平　279頁

猿二郎「こは冥加なるおん詞、ありがたきまでにおぼへはんべり。…もしかの奴原来り候はば、しかじかはからひ候べし」とて　猿二郎→桂之助　273頁

景春公のおん詞ともおぼえはべらず。…何等の証拠ありや。おそれながらうけたまはり度候　執権道犬→景春　352頁

また、「華麗な化政の読本界を豊かに賑わした作者」（横山邦治（1992））小枝繁の『催馬楽奇談』でも、次の例のように山東京伝と同じ傾向を示す。

某此程田舎に侍りつるうち、一匹の馬を得て候が、道すがら乗て試るに、尋常の馬よりは駿足にして、何ざまのもの、用に立べうもおぼへはべれば、献らばやと存候ひぬ。　八平次→成親卿　239頁

身も健になりはべれば、君に見参し奉ん為にまかり上り候。　四三平→少将殿　241頁

装束のかはりはべれば見違ひて候。　四三平→社人　247頁

逸平と申もの、近頃我家に居はべりつるが、舅の跡を慕ひ
上り候が　　女小満→知県相公　　306頁
三十ばかりなる女「さん候。あまりに怪しく候に、柩の蓋を披きて見給へよ」
　　三十ばかりなる女→少女　　341頁

特に「さん候」が女の発話に使われている。また、上方の単発読本である（横山邦治（1992）一柳嘉言の『鳥辺山調綫』は、一言で言えば、『雨月物語』に似たほぼ〈侍（はんべ）り〉体である。そして不徹底さも垣間見える。

半九郎も泪打払て「今日しも初て謁奉りて侍れど、此堀川なる人は、己が従弟にて侍る。
　　半九郎→女たち　　387頁

お染はさしぐみて「さん候。母なる者にて候が、去年の冬よりかゝる事にて、夫より打臥侍りて、…徒に歎きあかすのみにて侍り」
　　お染→薬師　　449頁

母は傍にちかく寄て、「何に半九郎君よ。お染が母にて候へ。未だ逢参らせし事は侍らねど、
　　お染の母→半九郎　　465頁

続編を執筆した萩原弘道も女の発話に補助動詞「候」が25例見られ、雅語「侍り」の新しい用法が継承されていない。

限られた作品の比較からなので、補助動詞「候」「侍り」の性差による使い分けを、馬琴が最初に行ったかどうかはわからない。が、読本というジャンルにおいて、この使い分けが、一般的であったとは言い難いであろう。

さらに、馬琴が「候」「侍り」に強い口語性を付与したかと思われる語形が存在する。橋本四郎（1956）で指摘されている「で」であり、それを使って「にて候」「にて侍り」を口語化した「で候」「で侍り」である。これらの語形は、萩原の続編を除き、比較した作品にはほとんど見られないものであった。例を示す。

やよ八郎どの、孝吉ぬし、上総より参りたり、一作で候ぞ。女児濃萩に産せ給ひし、その子はこれで候ぞ。
　　百姓一作→八郎・孝吉　　八犬伝　一127

老僕九念次は、遥にあるじの方に向ひて、「是なん犬田小文吾ぬしで候。」
　　老僕九念次→常武　　八犬伝　三268

俺家より、起りし事で候へば
　　百姓須本太郎→小文吾　　八犬伝　四287

尚真夜中で候へば
　　百姓須本太郎→小文吾　　八犬伝　四287

（阿夏は）二代の名妓で候ひしに、…むかし相見し京師の歌妓、件の夏で候ひし。
　　近習の侍无四郎→兼顕　　近世説1・375

我兄十三屋九四郎は、浪速に名だゝる侠者にて、…下高者で候へば
　　成勝の従者通能→成泰・知量　　新局3・232

父直秀は鎌倉殿の、恩顧の武士で侍りしかば

手束→番作　八犬伝　一274

赤岩一角武遠と、喚れし郷士は恥しながら、妾が良人で侍りにき。…こよなき慈善で侍らまし

船虫→次団太　八犬伝　四298～299

聞くが如くは歹くもあらぬ、商量で侍るめり。…そが捷径で侍らずや」と

侯鯖楼の女房→主人　近世1・350

…とある幾文字は、御身の手迹で侍るべし。

乙芸→落葉　新局2・432

これらの語形はやんごとない武士・貴族階級よりは下位の商人・侠客・百姓の発話に現れやすいようである。さらに用例が集まれば、性別の枠を作り、次に身分差に配慮するという文体意識がうかがえるかもしれない。

山崎久之（1963）では、近世上方語の口語では、男性語・女性語それぞれに独自の待遇体系があったと指摘されている。とすれば、馬琴は他の作者と違って、雅語を使用する際、ことばが先に存在して世界を構成せずに、現実世界のあり方にことばを従わせたということになる。「候」と「侍り」は現実の性差に基づいて使い分けられ、いわば男は男らしく、女は女らしく、それぞれが世界に生き生きと存在している。特に「候」は女の登場人物たちの発話の世界からは強く拒まれている。他の作家と比べ、伏姫、浜路、白縫、姑摩姫、船虫、阿公、阿夏など、女性たちをことばの上でくっきりと浮かび上がらせているわけである。ただし、その性差を端的に示す口語が補助動詞に求められるかどうかは即断できない。

さて、八犬士の一人犬坂家野は女田楽師旦開野（あさけの）として登場して、

やよ、犬田ぬし、吾儕で侍り。　八犬伝　三313

命を喪ひ給はんは、愚にも侍るかし。…そは亦手段の侍るなり。…出るに難きことやは侍る　八犬伝　三314

と「侍り」体で言葉を発するけれども、父の敵を打ち正体を明かし、荘介・小文吾に玉の来歴を語る段では、

玉の来歴を、母の手して写着て、玉もろ共に俺が腰着の、護身嚢に蔵めたりしを、稍物情を知る比に、綽怎々と母親の、説示し候ひき。　犬伝　四418

と「候」体で話す。これは筆のすべりではなく、今まで述べてきた馬琴の言葉の使い分けに従ったものである。ところが、正体を明かし自ら男である事を語る発話（三320～327）において、「吾儕は素より女にあらず」（320）「吾儕をも亦田楽の」（321）「吾儕に殺て蒐るを」（326）というように、自称の代名詞は旦開野の場合と変わっていない。「這少年」（四385）の事情は何を物語るものであろうか。

二　例外と見える「侍り」その一

表1に示すように、男の発話において「侍り」が出現する場合がままある。しかしこれは、およそ二つのケースに分けられる。

一つ目は、表1の「その他・備考」欄に記すように、その発話の主体が男の子どもや若年層であり、かつ子どもとしての発話、親子間で情を交わす発話の場合である。これは『新局童子訓』以外の作品によく見られる。

弓張月21例のうち20例（幼少時の為朝、為朝の子である為頼・嶋君・朝稚・舜天丸、琉球国の忠臣毛國鼎の子である鶴・亀）、八犬伝22例のうち19例（仙人の弟子である童子、春王君、安王君、女装で育てられていた犬塚信乃・少年信乃、少年荘介、若者小文吾）、近世説12例全て（玉五郎、朱之介と改名する前の珠之介）、開巻22例のうち19例（小六、庶吉、復市）がこのケースである。次に例を示す。

おもはずも、声をたて侍りし」とて、まはらぬ舌に愛〃しく、　　嶋君→父為朝　弓張月　上322

おもひわきかね侍る　　朝稚→白縫　弓張月　上394

扈従し侍る里之子なり。　　鶴→間者（為朝）　弓張月　下184

（母手束が）諭せば信乃は酸鼻（なみだぐみ）、「宣ふ所こゝろ得侍り。…哀しきこと限り侍らず。

幼少の信乃→母　八犬伝　一300〜301

（父文五兵衛）人の喧嘩を買ふなよ。」といへば小文吾微咲て、「そはこゝろ得て侍るなり

小文吾→父八犬伝　八犬伝　二241

養育の恩いと高きに、何をもて報ふべき。…と徇（れ）られたるに侍らずや。　　玉五郎→老婆浮木近世説　1・38

土葬に骨を折んより、輒（たやす）き所為に侍らずや」と（珠之介が）いふに阿夏は又驚きて、「原来そなたの所為なりし歟。尚九才なる童の智には、

九歳時の珠之介→母の阿夏　近世　1・222

嫂々目今（あねごだいま）かへり侍りぬ。其里（そこ）開て給ひね

少年柒六→兄嫁の乙芸　新局　2・464

たとえば、女装で育てられている犬塚信乃が「侍り」を使うこと（一300〜303に6例）、また最初は父に対して殊勝に子どもらしく

こゝろえ侍り

子為朝（幼少）→父為義　弓張月　上76

と答えていた為朝が、「呵〃（からから）」と嘲笑って、登場したかと思うとすぐに、

おもはず噴飯の咎を得て候なり。　　弓張月　上78

と並み居る諸侯の前で「候」を使い、瞳を二つ持つ異形の容貌にふさわしい、効果的な再登場を果たしていることなど、合理的に「侍り」が選ばれている。また『椿説弓張月』において実の父母を訪ねてはからずも再開できた朝稚が、盗賊であるため

にそ知らぬふりをしている母白縫に対し、

朝稚は言の葉の、たゞならぬにてその人とは、嚮より猜し給へども、喩るゝ道理に、ふたゝび問んやうもなく、はふり落る涙を拭ひ、「縦わが父世にありとも、義を守りて名告たまはじ、と宣（のたまは）するをいかでかは、あしうは聞侍るべき。…情ぞ慈悲ぞ、しらして。」とかき口説たまへば

朝稚→白縫　弓張月　上３９６～３９７

と「侍り」を共起させて子供っぽく懇願するが、（大人の）道理を諭されて後は、あくまでも他人として、

母の髑髏を賜る事、氏神の示現に違ねば、父の事は思ひたえ、直に歸り候ひなん。

というように、以下は「候」体で、気丈に振舞い応答するのも、合理的なことばの選択である。

「侍り」は、女童や、浜路や姑摩姫など女主人公の幼年時代のことばとしても使われていて、一見、男の発話として例外に見えるこのケースの「侍り」は「おんなこども」の領域に位置づけられていると言える。

三　例外と見える「侍り」その二

二つ目のケースは、通常よりも格段にへりくだった、「恐縮」に代表される場合で、『新局玉石童子訓』に多く見られるものである。

（蟇六は）恭しく額をつき、「倉卒至極、遺憾千万、さらば再て来臨まで、預り侍る」と先にたちて、玄関の板敷まで、送り出つゝ　八犬伝　二60

（老夫婦）行往不便（あしてまとひ）に侍らめども　八犬伝　三２０１

（難病にかかった朱之介）こは聊に侍れども、今より後の食料に（看病のお礼に）、先受収め給ひね　新局２・５３１

最恥しき事ながら、昨宵部領川の上にて、峯張主の一棒を、受損ねける撲瘡（うちみ）に侍り。　新局３・３６９

特に百姓宿六はへりくだりの度が強い人物として登場している。

又愛たき涯りに侍り。小姐様の面瘡御平癒と、朱之介が毒瘡の、平癒と其事相似たり。…」といひつゝ…件の首尾を呾き示せば、　新局２・５４７

喃阿夏様、片は理りに侍るかし。…然ぞ羨しく思ひ侍らん。…」と陪話るを　新局２・５５６～５５７

恨の数数を、鎮めて只得渋々に、件の金を受戴きて、「こはうち閣し給はずに、御心使に預り侍り」　新局２・５８３

娘さま造作になり侍り　新局２・５８３

この新しい「侍り」使用の芽生えが、自らの失明による『新

局玉石童子訓』からの口授（代書）に由来するのか、それとも何らかの現実のことばの動き、表現欲求があったのかは現時点では確定できない。ただし、この新しい「侍り」に、性別による使い分けの体系を一変させるほどの勢力はない。

おわりに

以上論じてきた事をまとめると

・馬琴は、雅語「侍り」「候」を、大きくは「おんなこども」と「おとこ」という現実世界に対応している性別の機能を新しく付与して使い分け、その読本の雅俗折衷の文体を形作っている。この馬琴の使い分けは読本の文体として一般的ではなかった可能性がある。

・「で候」「で侍り」は俗の表現として他の読本群に対して示差的である可能性がある。

・「侍り」については、必ずしも年少者を主語としない、へりくだりの度の強い新しい用法が芽生えている。

【参考文献】

石坂　正蔵（1944）『敬語史論考』大八洲出版

井上　豊（1973）「白石・真淵・宣長の敬語使用」『敬語講座4　近世の敬語』明治書院

鈴木丹士郎（1973）「西鶴 馬琴の敬語」『敬語講座4　近世の敬語』明治書院

野口　武彦（1977）「江戸期小説の言語構造――読本文体の形成をめぐって」『言語生活』309

野村　雅昭（1973）「俳文・俳論の敬語」『敬語講座4　近世の敬語』明治書院

橋本　四郎（1956）「里見八犬伝の文体とその文語」『国語国文』26巻11号（本文は『日本文学研究資料叢書　馬琴』所収のものを参考にした）

森　修（1959）「奥の細道の解釈と文法上の問題点」『講座解釈と文法6』明治書院

山崎　久之（1963）『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院

横山　邦治（1974）『読本の研究　――江戸と上方と――』風間書房

同　（1992）「作品解説」『新日本古典文学大系80　繁野話　曲亭伝奇花釵児催馬楽奇談　鳥辺山調綫』岩波書店

【注】

（1）本稿で調査対象とした作品とその本文は、『椿説弓張月』（日本古典文学大系本）・『南総里見八犬伝』（岩波文庫改版本）・『近世説美少年録』『新局玉石童子訓』（新編日本古典文学全集本）『開巻驚奇侠客伝』（新日本古典文学大系本）『小説比翼文』（叢書江戸文庫本）である。なお『新局玉石童子訓』は新編日本古典文学全集『近世説美少年録』②③として収められている。用例の出典表示は、『椿説弓張月』（日本古典文学

大系本）→弓張月上・下ページ数、『南総里見八犬伝』（岩波文庫本）→八犬伝・文庫本の巻数・ページ数、『近世説美少年録』『新局玉石童子訓』（新編日本古典文学全集本）→近世説または新局・全集の巻数・ページ数。本文のルビは論証に支障のない限り一部省略した。

（2）『兎園小説別集』中巻「けんどん名義」において、待遇語「子・殿・様」の歴史的変化を認識していたこと、書簡における対称について注意していたことが指摘されている（87頁～89頁、99頁～１００頁）。

（3）本稿で調査した作品とその本文は『英草紙』『西山物語』『雨月物語』『春雨物語』（新編日本古典文学全集本）・『繁夜話』『本朝水滸伝』『昔話稲妻草紙』『催馬楽奇談』『鳥辺山調綫』『開巻驚喜俠客伝』（新日本古典文学大系本）その他は叢書江戸文庫本『中本型読本集』『石川雅望集』からである。

（つかもと　たいぞう／第三三回卒・宮崎女子短期大学）